

[B年]復活節第4主日(2026年4月26日)**【旧約聖書日課】レビ記 19章9～18節**

9穀物を収穫するときは、畑の隅まで刈り尽くしてはならない。収穫後の落ち穂を拾い集めてはならない。10ぶどうも、摘み尽くしてはならない。ぶどう畑の落ちた実を拾い集めてはならない。これらは貧しい者や寄留者のために残しておかねばならない。わたしはあなたたちの神、主である。

11あなたたちは盗んではならない。うそをついてはならない。互いに欺いてはならない。12わたしの名を用いて偽り誓ってはならない。それによってあなたの神の名を汚してはならない。わたしは主である。

13あなたは隣人を虐げてはならない。奪い取ってはならない。雇い人の労賃の支払いを翌朝まで延ばしてはならない。14耳の聞こえぬ者を悪く言ったり、目の見えぬ者の前に障害物を置いてはならない。あなたの神を恐れなさい。わたしは主である。

15あなたたちは不正な裁判をしてはならない。あなたは弱者を偏ってかばったり、力ある者におもねってはならない。同胞を正しく裁きなさい。16民の間で中傷をしたり、隣人の生命にかかわる偽証をしてはならない。わたしは主である。

17心の中で兄弟を憎んではならない。同胞を率直に戒めなさい。そうすれば彼の罪を負うことはない。18復讐してはならない。民の人々に恨みを抱いてはならない。自分自身を愛するよう隣人を愛しなさい。わたしは主である。

【使徒書日課】ヨハネの手紙一 4章13～21節

13神はわたしたちに、御自分の霊を分け与えてくださいました。このことから、わたしたちが神の内にとどまり、神もわたしたちの内にとどまってくださることが分かります。14わたしたちはまた、御父が御子を世の救い主として遣わされたことを見、またそのことを証ししています。15イエスが神の子であることを公に言い表す人はだれでも、神がその人の内にとどま

てくださり、その人も神の内にとどまります。16わたしたちは、わたしたちに対する神の愛を知り、また信じています。神は愛です。愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってくださいます。17こうして、愛がわたしたちの内に全うされているので、裁きの日に確信を持つことができます。この世でわたしたちも、イエスのようであるからです。18愛には恐れがない。完全な愛は恐れを締め出します。なぜなら、恐れは罰を伴い、恐れる者には愛が全うされていないからです。19わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです。20「神を愛している」と言いながら兄弟を憎む者がいれば、それは偽り者です。目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができません。21神を愛する人は、兄弟をも愛すべきです。これが、神から受けた掟です。

【福音書日課】**ヨハネによる福音書 13章31～35節**

31さて、ユダが出て行くと、イエスは言われた。「今や、人の子は栄光を受けた。神も人の子によって栄光をお受けになった。32神が人の子によって栄光をお受けになったのであれば、神も御自身によって人の子に栄光をお与えになる。しかも、すぐにお与えになる。33子たちよ、いましばらく、わたしはあなたがたと共にいる。あなたがたはわたしを捜すだろう。『わたしが行く所にあなたたちは来ることができない』とユダヤ人たちに言ったように、今、あなたがたにも同じことを言っておく。34あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。35互いに愛し合うならば、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、皆が知るようになる。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

レビ記 19章9～18節

⁹土地の実りを刈り入れる場合、あなたがたは畑の隅まで刈り尽くしてはならない。刈り入れの落ち穂を拾い集めてはならない。¹⁰ぶどう畑の実を摘み尽くしてはならない。ぶどう畑に落ちた実を拾い集めてはならない。貧しい人や寄留者のために残しなさい。私は主、あなたがたの神である。

¹¹盗んではならない。欺いてはならない。同胞どうして互いに偽ってはならない。¹²私の名によって偽りの誓いをしてはならない。あなたの神の名を汚してはならない。私は主である。

¹³隣人を虐げてはならない。奪い取ってはならない。雇い人の賃金を翌朝までとどめてはならない。¹⁴耳の聞こえない人を呪ってはならない。目の見えない人の前につまずく物を置いてはならない。あなたの神を畏れなさい。私は主である。

¹⁵裁きにおいて不正をしてはならない。弱い者を偏ってかばってはならない。強い者におもねってはならない。同胞を正しく裁きなさい。¹⁶民の間を回って、中傷してはならない。隣人の命に関わる偽証をしてはならない〔直訳→血の上に立ってはならない〕。私は主である。

¹⁷心の中で兄弟を憎んではならない。同胞を繰り返し戒めなさい。そうすれば彼のことで罪を負うことはない。¹⁸復讐してはならない。民の子らに恨みを抱いてはならない。隣人を自分のように愛しなさい。私は主である。

ヨハネの手紙一 4章13～21節

¹³神は私たちに、ご自分の霊を分け与えてくださいました。これによって、私たちが神の内にとどまり、神が私たちの内にとどまってくださることが分かります。¹⁴私たちはまた、御父が御子を世の救い主として遣わされたことを見、またそのことを証ししています。¹⁵誰でも、イエスを神の子と告白すれば、その人の内には神は

とどまってくださり、その人も神の内にとどまります。¹⁶私たちは、神が私たちに抱いておられる愛を知り、信じています。

神は愛です。愛の内にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってくださいます。¹⁷このように、愛が私たちの内に全うされているので、裁きの日に私たちは確信を持つことができます。イエスが天でそうであるように、この世で私たちも、愛の内にあるのです。¹⁸愛には恐れがありません。完全な愛は、恐れを締め出します。恐れには懲らしめが伴い、恐れる者には愛が全うされていないからです。¹⁹私たちが愛するのは、神がまず私たちを愛してくださったからです。²⁰「神を愛している」と言いながら、自分のきょうだいを憎む者がいれば、それは偽り者です。目に見えるきょうだいを愛さない者は、目に見えない神を愛することができないからです。²¹神を愛する者は、自分のきょうだいも愛すべきです。これが、私たちが神から受けた戒めです。

ヨハネによる福音書 13章31～35節

³¹さて、ユダが出て行くと、イエスは言われた。「今や、人の子は栄光を受けた。神は人の子によって栄光をお受けになった。³²神が人の子によって栄光をお受けになったのであれば、神もご自身によって人の子に栄光をお与えになる。しかも、すぐにお与えになる。³³子たちよ、今しばらく、私はあなたがたと一緒にいる。あなたがたは私を捜すだろう。『私が行く所にあなたがたは来ることができない』とユダヤ人たちに言ったように、今もあなたがたにも同じことを言うておく。³⁴あなたがたに新しい戒めを与える。互いに愛し合いなさい。私あなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。³⁵互いに愛し合うならば、それによってあなたがたが私の弟子であることを、皆が知るであろう。」

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

- ・4月26日「復活節第4主日」の日課主題は「キリストの掟」。
- ・旧約日課は、「レビ記」から、「神聖法集」の中で「十戒」規定に相当する「掟」を提示する箇所の一部。使徒書日課は、「ヨハネの手紙一」から、神から受けた「掟」として兄弟を愛することを説く箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、最後の晩餐の席で語られた教えの冒頭で「新しい掟」を示される箇所。

旧約日課(レビ 19章より)

- ・「レビ記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)の区分で「律法(トーラー)」の第三巻として配されている律法典文書。「律法」全体の中では、「出エジプト記」から「申命記」までで展開される「モーセ物語」の第二部を構成するものとなっているが、「物語」進行は無く、「出エジプト記」19章でシナイ山に辿り着き「十戒」をはじめとする「律法」を授与された場面設定に含まれる形で、ひたすら、イスラエルに与えられたさまざまな律法典(戒め、掟、法など)が主題別に羅列される構成となっている。通例、1~16章までと17章以下とに区分され、後半部は「神聖法集」などと呼ばれる。日課箇所は「神聖法集」に含まれる箇所。
- ・日課箇所は、「神聖法集」の中でも18~20章のまとまりの中に位置する。このまとまりは、イスラエルの民が、出てきたエジプトやこれから入っていくとするカナンの地の「掟」に従うことなく、「主」の示す「掟」や「法」に従うようにという指示(18:2~5、20:22~23)を大枠として具体的な「掟」や「法」が示される。
- ・日課箇所を含む19章は、「出エジプト記」の「シナイ契約」で示される「十戒」および「契約の書」(20~23章)に相当する宗教的あるいは倫理的な規定がまとめられている。特にこの章では、「わたしは主である」または「わたしはあなたたちの神、主である」という定型句によって付けられた区切り目が繰り返し用いられていることが特徴となっている。この定型句は、規程の強調と解することが一般的であるが、対人関係を対神関係と明確に結びつけようとする意図によるものとも解せる。特に日課箇所(9~18節)は、隣人に対する義務や配慮に関する規定が集中して配置されているが、短い区切りで定型句が置かれている。
- ・日課箇所の教えは、概して、だれであれ隣人に公正な対応をすべきことを強調している。12節および14節では、これらの戒めに反する行為が「神」に対する不実として示されており、一連の戒めに基づく公正な行動を促す動機づけが、「神、主」の視座を認識することに置かれていることが分かる。
- ・17~18節の特に「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」は、新約・福音書で主イエスが「最も重要な掟」として引用している戒め(マルコ 12:31 など)。これを「律法」の要約の一つと見る例は、ユダヤ教ヒレル派でも知られている。

使徒書日課(Iヨハネ 4章より)

- ・「ヨハネの手紙一」は、「ヨハネ福音書」、「手紙二」、「手紙三」と共に「ヨハネ文書」として扱われる文書群の中の一つ。
- ・「ヨハネ文書」は、初期教会でペトロらが主導した教会ネットワークとは一定の距離を置いて発展したと考えられる使徒ヨハネを指導者とする教会共同体(「ヨハネの教会」などと呼ぶ)で作成された文書群とされる。「ヨハネの教会」は、初期にはサマリア地方で教会を形成し(使徒 8章などから推測される)、その後ガリラヤ地方に移った後、エフェソに拠点を移し、最終的には使徒ヨハネが「エフェソ教会」の指導者(初代司教!)になったと、教会伝承では伝えられている。しかし、「ヨハネの教会」がエフェソに拠点を移したころには、すでにペトロらを中心とした使徒らのネットワークの下にある教会共同体が形成されていたと考えられ、パウロも一時期この地を拠点にしていたことが伝えられているが(使徒 19~20章)、「使徒言行録」は「ヨハネの教会」がエフェソに拠点を移したことを伝えておらず、パウロ系の教会と「ヨハネの教会」の間に確執があった可能性が示唆される。それでも、「ヨハネの教会」は最終的に、ペトロやパウロの名のもとに形成されつつあった教会ネットワークに参画する道を選んだ結果、新約正典に「ヨハネ文書」が組み込まれることになったと考えられる。
- ・本書「手紙一」は、「書簡文書」として扱われるが、書簡としての様式(冒頭の定型、末尾の定型)を欠いており、差出人や宛先も不詳となっている。にもかかわらず「ヨハネ文書」として扱われてきたのは、おそらくこの文書が、「ヨハネ福音書」を補完するものとして不可欠と認識されていたから。蓋然性の高い仮説では、「ヨハネ福音書」に見られる改訂の痕跡(20章末尾の結語にもかかわらず、21章が置かれ再度結語が置かれている、など)から、「初版福音書」に対する誤解・語釈を正す目的で「手紙一」が作成され、この「手紙一」の指針に基づいて「改訂版福音書」が作成された、とされる。そこで、この「手紙一」で一貫して示される「掟(戒め)」に関する記述が、「改訂版福音書」で修正あるいは増補された内容と解される。
- ・「手紙一」が繰り返し示す「掟」は、すでに受けたものであるという意味で「新しい掟」ではないが、敢えて「新しい掟」として書く、と言われている(2:7~8)。その「新しい掟」の内容は、端的に「互いに愛し合うこと」(3:11,23、4:11,12)と提示されるが、まったく同じことを、「福音書」は最後の晩餐の席での主イエスの教えとして伝えている(ヨハネ 13:34、また 15:12)。
- ・本書簡では、一貫して「神を愛する者」が「兄弟を愛する」ことを疎かにすることを非難している。「兄弟を愛する」ことの根拠を、人としてのイエス(メシア!)が「命を捨ててくださった」ことに置いて展開させているが、日課箇所を含む4章では、これを究極的に「神が愛してくださった」こととして提示している。

福音書日課(ヨハネ 13 章より)

・日課箇所は、主イエスが十字架につけられる前の晩、弟子たちと最後の晩餐をなさった際に語られたものとして伝えられている一連の教えの一部。食事の前に為された「洗足」に伴う教えもあるが(13:12~20)、日課箇所は、食事を終え、イスカリオテのユダが席を外した後に弟子たちとの対話を通して語られたという一連の教えの冒頭部。

・最後の晩餐の席での出来事を、「ヨハネ福音書」は、「共観福音書」(マタイ、マルコ、ルカ)と共に、「主の晩餐」や「弟子たちの裏切り」としても伝えるが、それに続く教えは、「ヨハネ」独自のものとなっている。「ルカ」も最後の晩餐の席でのまとまった教えを伝えているが(ルカ 22:24~38)、「ヨハネ」の伝えている教えとはまったく異なる。

・日課箇所の教えは、「食事」の場面と「ペトロの裏切り」を告げる場面とに挟まれる位置に置かれている。「ルカ」も同様に、「食事」の場面と「ペトロの裏切り」を告げる場面とに挟まれる位置に短い教えを置いているが(ルカ 24:24~30)、「マタイ」と「マルコ」は、この二つの場面を続けて伝えている。「ルカ」と「ヨハネ」は、「ペトロの裏切り」を告げる前に、主イエスとの最後の「食事(晩餐)」にあずかった弟子のあるべき基本的態度を示すことが必要と考えたのかもしれない。

・日課箇所です「新しい掟」として提示される「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい」は、15:12 でも繰り返されており、13~15 章の一連の教えがこの「新しい掟」によって枠づけられていることが示されている。

・この弟子たちが「互いに愛し合う」という教えは、ここで「新しい掟」として提示されるように、本福音書中では、これまで示されてこなかった教えである。本福音書では 13 章前半の「洗足」の場面も含めて、ここまで、「愛」はもっぱら「神と人」「イエスと人」、「神とイエス」という関係の中で語られており、「人と人」という関係の中で「愛」が問われた場面はない。おそらく、本福音書全体は、当初、もっぱら、「イエス」を媒介として「人」が「神」との「愛」の関係に入ることに関心を集中させて作成されていたのだろう。ところが、それによって「人と人」とが「互いに愛し合う」という契機が見失われた受けとめがされたことに対して、「手紙一」で改訂指針が示され、主イエスが「新しい掟」として「互いに愛し合うこと」を教えられていたという伝承を補ったものと考えられる。この「互いに愛し合うこと」という視座は、明らかに後から増補された 21 章の中でペトロに命じられた教えにも見られる。

・「掟(エントレー)」(34 節他)は、「聖書協会共同訳」では「戒め」と訳されている。

・日課箇所は、主イエスを裏切った(引き渡した)「ユダ」が席を外したことを踏まえている。すなわち、「ユダ」の行為を単なる「裏切り」としてではなく、主イエスが「栄光」を受けることとして明確に位置づけている。

来週の誕生日 (4 月 26 日~5 月 2 日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-127「み恵みあふれる」は、19 世紀フィンランド・ルーテル教会信徒でフィンランド文学の教授クロンが自らも携わった讃美歌集に収録した讃美歌。曲は、フィンランドの伝統旋律から採られた。WCC の 1974 年版讃美歌集に採用されて広まった。
- ・21-417「聖霊によりて」(=□95 番、▣31 番「みたまによりて」)は、おそらく 1960 年代にルター派の P. ショルテスによって青年伝道用に作詞作曲された讃美歌。収録歌集にはギターコードが付されている。
- ・21-543「キリストの前に」(歌詞 = I 537「わが主のみまえに」)は、1881 年版『讃美歌』編纂に際して奥野昌綱が作詞、当初は「しずけき祈りの」(21-495 番)の曲、1903 年版『讃美歌』からは「わが主のみまえに」(I-537 番)の曲で歌われてきたものだが、『讃美歌 21』編纂に際して大幅に改作した歌詞に高浪晋一が新しい曲をつけた。

21-127「み恵みあふれる」

Herrasta Veissa Kieleni

English Translation

O sing my soul, your Maker's praise

1. O sing my soul, your Maker's praise / In grateful hymns ascending; / Whose steadfast love has crowned your days / With heavenly gifts un ending. / I sought the Lord, He heard my cry; / His holy angels hover nigh / The tents of those who love Him.
2. The Lord is good to those who seek / His face in time of sorrow, / Providing comfort to the weak / And grace for each tomorrow. / Though grief may tarry for a night, / The morn shall break in joy and light / With blessings from His presence.
3. The Lord will turn His face in peace / When troubled souls draw near Him; / His loving kindness shall not cease / To those who trust and fear Him. / Our God will not forsake His own; / Eternal is His heav'nly throne; / His kingdom stands forever.

21-417「聖霊によりて」

We are One in the Spirit

1. We are one in the Spirit, we are one in the Lord. / We are one in the Spirit, we are one in the Lord. / And we pray that all unity may one day be restored, / and they'll know we are Christians by our love, by our love. / Yes, they'll know we are Christians by our love.
2. We will walk with each other, we will walk hand in hand. / We will walk with each other, we will walk hand in hand. / And together we'll spread the news that God is in our land. / and they'll know we are Christians by our love, by our love. / Yes, they'll know we are Christians by our love.
3. We will work with each other, we will work side by side. / We will work with each other, we will work side by side. / And we'll guard each man's dignity and give up all our pride. / and they'll know we are Christians by our love, by our love. / Yes, they'll know we are Christians by our love.
4. So all praise to the Father from whom all things come. / And all praise to Christ Jesus, His only Son. / And all praise for the Spirit who makes us one. / and they'll know we are Christians by our love, by our love. / Yes, they'll know we are Christians by our love.